

まえがき

シヨッピンゲンセンターに行ったら、入り口に「大型犬用カート」と書かれたシヨッピンカートがありました。「大型犬用カート」の「犬」ってどう読むだろう。「いぬ」だろうか、それとも「けん」だろうか。そう考え始めた瞬間、あなたは言語学の世界に一歩足を踏み入れています。

妻は、「スープ、温めたから飲んでね」と言ってくれました。でも、最近は「スープ、温めてから飲んでね」と言うようになりました。「た」が「て」に替わっただけなのですが、なんとなく妻の気持ちも変わったような気がしています。そう思ったあなたも、知らないうちに言語学の世界に入り込んでいます。

こんなふうに、なんとなく言語学の世界に入ってしまったあなたに《ことばの仕組みが見える眼鏡》を差し上げるのがこの本のねらいです。その眼鏡さえあれば、今まで見えなかった美しくて、ちょっぴり不思議なことばの世界が見えるようになるはずです。

その眼鏡は、親も学校の先生も持っていません。言語学を研究している学者だけが持つ

ているのです。でも、そんな素敵な眼鏡を言語学者だけが持っているなんて、ずるいと思いませんか？ だって、ことばは言語学者だけのものではなく、私たちみんなのものだから。だから、言語学者からそつとその眼鏡を借りて、私たちの周りにあることばを眺めてみることにしましょう。

その眼鏡をかけて「キャベツの入ったコロッケパン」を見ると、二種類のパンが見えてきます。どうして二種類見えるのか、本書を読むとその謎が解けます。「大きいエビフライ」で「大きい」のは何でしょう？ 眼鏡越しに見てみると「エビ」と「エビフライ」が交互に浮かび上がってきます。「公園にジャイアンたちがいたよ」とドラえもんが言っているのび太が「ジャイアンは何人いたの？」などと質問することはありません。だって、ジャイアンは一人しかいないのだから。でも、「ジャイアン〈たち〉」って言っている。じゃあ、この〈たち〉って何？ この謎も本書を読めば解決します。

多くの謎を解くカギは、理論言語学にあります。理論言語学では、ことばを科学的に分析していきます。「ことばを科学的に分析する」とは、簡単にいうと、まず、ことばをよく《観察》して、つぎに、「このような構造をしているのではないか」という《仮説》を立てて、最後に、その仮説が本当に正しいのかどうかを多くの例文を使って《確認》してい

く作業のことをいいます。

忙しい毎日の生活の中で普段ことばを観察するなんてことはあまりありませんよね。でも、あることばがどういうわけか気になり、少しの間そのことばについて考えたことなら誰にでもあるはずです。実は、その瞬間にはもう、ことばの科学的分析のスタートラインに立っているのです。

ことばの科学的分析には、実験室も高価な機械もまったく必要ありません。必要なのは、あなたのことばへの好奇心とことばを慈しむところだけです。本書では35のお話と11の小断片をご用意しました。ようこそ！ことばのワンダーランドへ。

本田謙介・田中江扶・畠山雄二

1 「犬」をどう読むか

近所のホームセンターに行ったら、出入り口にたくさんのかートが置かれていました。そのカートには「大型犬用カート」と書かれてありました。このカートに書かれている「犬」ですが、みなさんはどう読みますか。実は、「犬」をどう読むかによって、このカートにのせてよい犬のサイズが変わるのです。

「大型犬（けん）用カート」のように「犬」を「けん」と読めば、大型犬（つまり、大きな犬）をのせるための専用カートという意味になります。しかし、「大型犬（いぬ）用カート」のように「犬」を「いぬ」と読めば、カートにのせる犬のサイズに指定はありません。つまり、どんなサイズの犬でものせることができる大きなカートという意味になります。

では、どうして、「犬」の読み方によってカートにのせる犬のサイズが変わってしまうのでしょうか。みなさんはわかりますか。

「大型犬用カート」を実際に声に出して読むことで、何かヒントがつかめるかもしれません。まずは「犬」を「けん」と読んでみましょう。



オオガタイヌヨウカート



オオガタケンヨウカート

(1) オオガタケンヨウカート

少し長いことばですので、どこかにポーズ（休止）を入れてみてください。

(2) オオガタケンヨウ カート

そうですね。オオガタケンヨウとカートの間にポーズが入りますよね。では今度は、「犬」を「いぬ」と読んでみましょう。

(3) オオガタイヌヨウカート

これもどこかにポーズを入れてみてください。

10

温めたから飲んでね

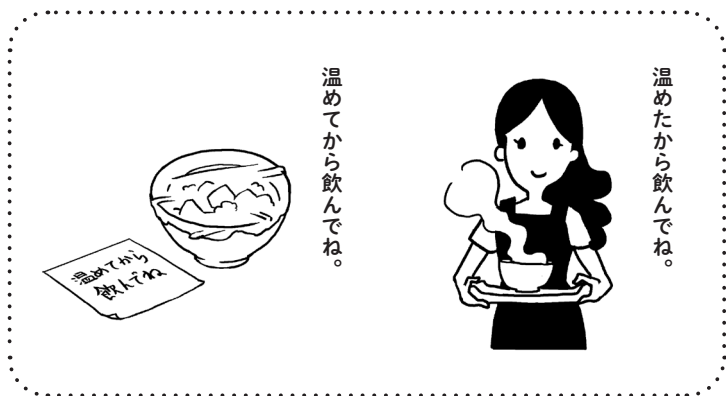
季節が少しずつ変わっていくように、人間関係も少しずつ変わっていく。微妙な風向きの変化で季節の移ろいを感じる人もいれば、微妙なことばの変化で人の心の移ろいを感じる人もいる。

残業してヘトヘトになって帰宅した夫に、かつての妻は(1)のように言ってくれた。あれから二十年がたち、今では(2)のように言うようになった。

- (1) スープ、温めたから飲んでね。
- (2) スープ、温めてから飲んでね。

(1)も(2)も丁寧さに違いがあるわけではない。あるわけではないけれど、たった一文字「た」から「て」への変化が、人の心の移ろいを如実に表しているとは言えないだろうか。

(1)ではスープを温める人と飲む人は別の人物である。つまり、妻がスープを温めて、夫が



そのスープを飲む。夫は妻からフルサービスを受けることになる。それに対して、(2)ではスープを温める人と飲む人は同じ人物、つまり夫である。つまり、夫はセルフサービスでスープを温めて飲むことになる。このように、二十年の間にフルサービスからセルフサービスへと劇的な変化を上げてしまったのである。

ところで、(1)と(2)はわずか一文字の違いしかない。具体的にいうと、「た」と「て」の違いしかない。(1)の「温めたから」のように「から」の前に「た」がついた「たから」が使われると、スープを「温める人」と「飲む人」が別の人物になる。それに対して、(2)の「温めてから」のように「から」の前に「て」がついた「てから」が使われると、今度はスープを「温める人」と「飲む人」が同じ人物になる。このことから、「温める人」と「飲む人」が《別の人物になるか同じ

17

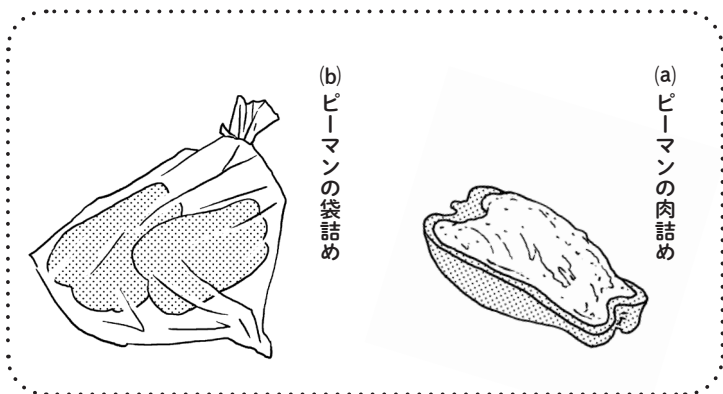
ピーマンの肉詰め

みなさんは「ピーマンの肉詰め」という料理は好きでしょうか？ 私は大好きです。この料理を作るために、スーパーで「ピーマンの袋詰め」を買ってきました。台所で料理に取り掛かろうとしたときに、ふと(1)と(2)のことばの形がとても似ていることに気づきました。

(1) ピーマンの肉詰め

(2) ピーマンの袋詰め

(1)と(2)は、「肉」と「袋」の部分しか違っていませんが、表しているものはまったく異なっています。(1)と(2)のことばで説明するとややこしくなりそうなので、まずはイラストを見てみましょう。



上のイラストのような状態はどちらもよく目にすると思います。(a)と(b)をことばで説明すると、それぞれ(3)と(4)のようになります。

(3) (a) 「ピーマンの肉詰め」とは

「ピーマンに肉を詰めたもの」

(4) (b) 「ピーマンの袋詰め」とは

「ピーマンを袋に詰めたもの」

(3)と(4)の説明で間違いありませんよね。言われてみれば「あたりまえ」と思うかもしれませんね。「それがどうしたの?」と思う人もいるでしょう。

では、もう一度(1)と(2)を読み直してみてください。それぞれ(5)と(6)のように解釈することも可能といえば可能ですよね?